

<研究の周辺>

研究の面白さとは何か

林 昌宏

最近、学会や研究会に参加する機会が多くなった。その席上、自己紹介をする際に「私の専攻は、政治学・行政学で、特に港湾計画の策定や港湾整備事業について、大阪湾をフィールドに調査、研究を進めています」と述べるようにしている。

港湾は、政治学の分野では、これまで全く注目を集めることのなかった研究テーマの一つと言ってよい。そのため学会などに行くたびに、いつも「なぜ『港湾』を研究しているのか」という質問を受ける。海を見ているのと心が落ち着く、過去に客船に乗って海外に行った経験があるため港や船に興味がある、という個人的関心も踏まえつつ（これを話していると、私の周りには鉄道や飛行機などの公共交通機関に対して強い愛着、豊富な知識を有する研究者がかなり存在しているという事実が分かってきたが、それはともかく）次のように答えるようにしている。

周囲を海に囲まれたわが国にとって、今も昔も海運が生命線的な役割を果たしており、輸出入貨物の99%が港を通じて取り扱われている。そして私は、産業や人々の生活を支える港湾がどのように整備されるのかについて分析することを通じて、政府間関係、広域行政、政治と経済の関わりなど、公共投資が内在的に抱える複雑な課題が浮き彫りとなることに関心を抱き、このような研究をするようになった、と。

公共投資をめぐる地方政府間関係など、様々な興味深い研究課題と向き合う日々が続いているが、これまでの道のりは決して平坦ではなかったように思う。私の専攻、研究テーマが固まったのは、ほんの数年前のことである。

もともと私は、地域開発とそれに伴って発生した環境・公害問題に着眼し、これらの問題をめぐる行政と市民の関係のあり方について明確にしたいという思いがあった。龍谷大学法学部、神戸大学大学院修士課程に在学中は、1970年代から1980年代にかけて展開された西宮甲子園浜埋立公害反対運動という事例を調査・分析した。この住民運動は、兵庫県による尼崎西宮芦屋港の港湾整備事業に対して異議を申し立て、行政側から整備内容の見直し、埋立面積の縮小という譲歩を引き出すことに成功したものであった。これをもとに2005年には、わが国の住民（市民）運動論のあり方、行政と市民の関係について問い直すことを試みた修士論文をまとめることができた。

だが、修士論文をまとめながら「環境・公害問題や住民（市民）運動の研究をライフワークにするのは、無理なのではないか」と考えるようになっていた。その理由は、事例の扱い方を誤ると論文がノンフィクション、ルポルタージュのような内容に変質してしまうこと、そして何よりも住民（市民）運動論の理論的な発展が、将来的に、ほとんど望めそうにないというところに不安を感じたからである。また、書き上げた修士論文を読み返しながら、地域開発の根源である推進体制およびその背景にある政治経済的要因の分析が、全くと言ってよいほどできていなかったことにも気がついた。当然ながら、取り扱った事例の総体的な現実を明らかにするには至らず、問題の客観的な構造も的確に捉えきれていなかった。今でも分析と自らの研究者としての姿勢に「甘さ」があったのではないかという悔いが強く残っている。

研究テーマの見直しを迫られるなか、神戸大学の指導教授の紹介により、修士課程修了後は研究生として京都大学経済学研究科に在籍することになった。京都大学で過ごした2年間は、自分が本当に「やりたい」と思うことのできる研究テーマを探し続けた日々でもあった。

今から思い返すと研究テーマの見直しは、想像以上に大変な作業であった。新たな研究テーマは、一向に決まらず、あつという間に月日だけが過ぎていくことに焦りを感じながら、手当たり次第に文献や論文を読み続けたことが思い出される。

2005年の夏であったと思うが、修士論文を読み返しながら、ふと「港」について調べてみようという気持ちになった。それまであまり気に留めることはなかったが、港は、私にとって身近な風景であった。幼少の頃、病気がちであった私は、幾度となく神戸市のポートアイランドにある病院に入院していた。病室から飽きずに見ていたのは、六甲山の緑の山並みと青い海、色とりどりの船舶と白い航跡、そして多くのコンテナ貨物を取扱う神戸港の活況であった。

「そうだ、自分の好きだった港について調べてみよう。ただ、日本の産業や生活を支えるインフラなだけに研究も多いだろう。入り込む余地はあるのか？」このような期待と不安の入り混じった思いを抱きつつ、港湾に関する文献を調べてみた。港湾の荷役・運営・労働などを分析した研究は、確かに数多く存在していた。しかし、港湾を整備・管理する地方自治体の内的構造について言及したそれは、ほとんど存在しないようであった。行政による港湾整備は、いかなる特徴を有しているのか。この点を分析すれば何か新しい発見があるという手ごたえを、まずは掴むことができた。つづいて、大阪湾の港湾整備に関する文献や資料に目

を通してみた。大阪湾では、神戸市、大阪市、兵庫県、大阪府が、それぞれ港湾を管理している。そして、それらの地方自治体は、これまで時として競争関係にあり、調整なき港湾整備を展開していたのではないかと、という疑問を抱くようになった。

2006 年の夏、このような私の疑問を解いてくれたのが、財政学者の島恭彦が 50 年近くも前に発表した論文「所得倍増計画と公共投資」（『経済論叢』86 巻 5 号・87 巻 2 号、京都大学経済学会、1960 年・1961 年）との出会いであった。島が指摘していたのは、公共投資が独占間の競争にひきずられて、それ自体無統制になり重複投資になりやすい傾向にあること、公共投資と公共投資との間に競争関係が生じることなど、今日に至るまで解決し得ていない構造的な問題についてであった。この論文との出会いを通じて、無統制で重複した公共投資を行なう政府・地方自治体の内的構造を明らかにしていくことが自らの新しい研究テーマとしてふさわしいのではないか、という思いを強くするようになった。

その後、2007 年 4 月からは、大阪市立大学大学院博士課程に進学することになった。博士論文のテーマも上述の問題関心を反映し「公共投資の競合とその影響」とし、兵庫県南部の地域開発、港湾整備を事例としながら研究を進めている。もちろん、その中心には「港湾」がある。

博士後期課程も 3 年目となり、現在では、あちらこちらから「早く論文をまとめなさい」というアドバイス（「教育的なプレッシャー」とも言う）を頂戴している。また「面白い研究テーマですね」といった、本当にありがたい声もかけていただけるようになった。その声に何とか応えたいと思いながら、調査に出かけデータを整理しているうちに、瞬く間に時間だけが過ぎていく。これには正直、不安を感じずにはいられない。だが、いま自分にできる限りのことをするしかないのである。

最後に、あらためて、これまで大学で過ごした 10 年間の振り返ってみた。この数年、特に京都大学、大阪市立大学では、充実した研究環境と、自らが研究したいと思うテーマに向き合うことができていると感じる。もちろん研究報告や論文で論理展開や調査に不十分な点があれば、指導教授や研究者仲間から鋭いチェックや建設的なアドバイスを受けることになる。ただし、彼らから研究計画などを強制されたことは、これまで一度もない。それぞれが自由な発想のもとで研究を進めるといふ、基本的でかつ最も重要な研究環境が保障されているのである。

私の場合は、最近になってようやく、自由な発想が保障され、その環境のもとで研究を続けられることが、

どれほど幸せで大切なものであるかを知るに至った。それというのも私はかつて、他者によって研究計画、発想や意見を完全にコントロールされそうになったことがあるからである。幸いにも多くの方の支えがあり、このような劣悪極まりない研究環境から抜け出すことができたが、それはあまりに苦すぎる経験であった。

ただし、このような経験をしたからこそ私は、自らが知りたいこと、不思議だと思うこと、心惹かれることに気づき、それらを明らかにしていくところ研究の面白さがあると確信している。そして、決して独善的にならず、真理を公正に探究し続けることに研究者としての使命があるのではないだろうか。

（大阪市立大学大学院、日本学術振興会特別研究員）